

舞姫

映画文学人生論

森鷗外 (1862-1922)

『舞姫』1890 「国民之友」

『キタ・セクスアリス』1909 「スバル」

『予が立場 (Resignationの説)』1909 「新潮」

『雁』1911 「スバル」

シヨオペンハウエルを右にし、シルレルを
左にして、終日兀坐する我読書の窓下に、

森鷗外『舞姫』の主人公太田豊太郎は、大学の法学部でいつも一級的首（はじめ）のその名が記される秀才である。某省に出仕して、官長の覚えめでたく、洋行して一課の事務を取り調べよという命を受けた。赴任先はドイツのベルリン。

「余は模糊たる功名の念と。檢束に慣れたる勉強力とをもちて、忽ちこの欧羅巴の新大都の中央に立てり」。「何等の光彩ぞ、我目を射むとするは。何等の色沢ぞ、我心を迷はさむとするは、菩提樹下と訳するとき、幽静なる境なるべく思はるれど、この大道髪の如きウンテル・デン・リンデンに来て両辺なる石だたみの人道を行く隊々の乙女を見よ。

豊太郎は乙女を見てはいけなかったのに、秀才の心は舞姫に迷わされてしまった。「嗚呼、何等の悪因ぞ。この恩を謝せんとして、自ら我僑居（けうきよ）に来こし少女は、シヨオペンハウエルを右にし、シルレルを左にして、終日（ひねもす）兀坐（こつぎ）する我読書の窓下に、一輪の名花を咲かせけり」。

そもそも、読書の選択に問題がある。シヨオペンハウエルは厭世的哲学者であり、シルレルは浪漫的文学者である、どちらも法学士や医学士の読書にはふさわしくない。文学士なら、終日兀坐して読んでもよいかもしれないが。



舞姫

映画文学人生論

豊太郎は舞姫と愛し合い、やがて、「生まれん子は君に似て黒き瞳子をや持つならん」と言われる。ショウペンハウエルよりもシルレルの影響のほうが大きかったらしい。

しかし、そのままベルリンにとどまれば、秀才の前途はお先真つ暗になってしまう。彼は友人の相沢謙吉と相談し、舞姫の母に微かなる生計をむむに足るほどの資本を与へ、あはれなる狂女の胎内に遺しし子の生まれむをりの事を頼みおいて、帰国の途についた。

「嗚呼、相沢謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど我脳裡に一点の彼を憎むところ今日までも残れりけり」。

「今日」というのは作者の森鷗外がこの小説を執筆した明治二十三年、二十八歳の時である。舞姫との一件が祟ったのか、それとも陸軍省勤務の身でありながら小説を発表したのがいけなかったのか、昇進が遅れ、不遇の人になった。

その後、明治四十二年、四十七歳で、『平夕・セクスアリス』を執筆する。舞姫との一件は省略されているが、無頼漢肌の土地の好男子の連れの凄味掛かった別品と関係したと書かれており、掲載誌の『スバル』は発禁処分を受けた。『予が立場 (Resignationの説)』を発表したのはその年だ。やっとシルレルよりもショウペンハウエルの心境に近づいてきたとみうけられる。

秋風や白木の弓に弦張らん

去来